

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Mistralの叙事詩Mirèioの創作過程
Author(s)	杉, 富士雄
Citation	フランス文学, 4・5 : 1 - 5
Issue Date	1963-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040849
Right	
Relation	



Mistral の叙事詩 *Mirèio* の 創作過程

杉 富士雄

1859年南仏の無名の若い詩人 Frédéric Mistral (1830-1914) の叙事詩 *Mirèio* (1859) を受けとった Alphonse Lamartine (1790-1869) は、その偉大な芸術性に深く感動して次のように述べた。「偉大な叙事詩人が誕生した…ホメロスを彷彿せしめる真実の詩人が…方言を一つの言語に仕上げた詩人が…はたして、これは奇跡というべきであろうか。まさしく、この奇跡こそ、いまわが手のうちに収められているのだ」と。

Lamartine がこのような絶大な讃辞を惜まなかった叙事詩 *Mirèio* の高い芸術的価値は、それより45年後、Mistral がフランスで最初の Nobel 賞授賞者に選出された (1904年) ことによって、ゆるぎないものになったと申しても過言ではあるまい。

いま、*Mirèio* の創作過程を、作品発想の1851年夏から、作品刊行の1859年までについて考察するに先立ち、一応1845年まで遡って詩人 Mistral の文学生活を顧みよう。

1845年、当時弱冠15才であった Mistral は、はじめて Roumanille (1818-91) と邂逅して、南仏語および南仏文学の顕揚のために協力することを誓ったのである。それより3年後の1848年7月、Mistral は Roumanille に宛てた書簡の中で、「種蒔き *li semenço*, 養蚕 *li magnan*, 刈入れ *li missoun*, 麦打ち *lis iero*, 葡萄摘み *li vendumio* …を主題とする大規模な詩の創作を思いついた」

旨を述べている。この「大規模な詩」こそ後に6330行にも及ぶ大叙事詩 *Mirèio* に発展する「刈入れをする人びと」*Li meissoun* なのである。さて約1000行から或るこの叙事詩「刈入れをする人々」は、詩人の死後 Pierre Devoluy (1862-1932) によって1927年“*Revue de France*”誌上に始めて発表されたものであるが、当時18才の青年 Mistral の異常に豊かな詩才を剩すところなく伝える作品と云えよう。しかるに、旧師 Roumanille は、この作品が把力に欠けているとしてきびしく咎めたのである。これに対して、Mistral は、1848年12月15日付の書簡の中で次のように弁明している。

「わたしの意図するところは、我々 Provence の人びとの風習をあるがままに描き出すこと、すなわち、喧嘩、嫉妬、恋愛、道化を、最後には、わたしが刈入れをする人びとのなかにまじって実際に知り得たすべての状景を写し出すことにあった。一言にして云えば、ありのままの自然を把握することにあったのだ。それゆえ、わたしは疲労も奔走もいといはしなかった。彼等と夕餉を共にして彼等の食事を研究し、麦を束ねながら小作女の歌声に耳を藉し、一ヶ月の間、太陽の灼熱のもとで労働する女たちが、藁堆積の蔭やテントのなかで昼寝しているのをみるにつけ、わたしの詩を少しでも生氣豊かなものにするような表現の幾つかを採集したのである」と云っている。

この書簡のなかに、我々は Mistral の当時の写実的な創作態度を明確に把握することができるのであるが、Mistral 自身も叙事詩「刈入れをする人々」にみられる適確な自然描写にことさら愛著を覚えたとみえ、同じ自然描写を *Mirèio* のなかで用いる一方晩年の「回想記」*Moun Espelido, Memòri e Raconte* (1906) の中では、その若干の詩句を引用掲載して、往昔のひなびた農業方法のすたれてゆくさまを嘆いているのである。

さて、Mistral は 1848 年から 51 年まで Aix-en-Provence の法科大学の学生として過している。その間、Mistral はスペイン語を学び、Dante を繙くことによって、Roumanille の処女詩集「雛菊」*Li Margarideto* (1847) の出版に臨み、Roumanille と協議して決めた orthographe が、多くの言語に比較して合理性に欠けていることを記している。Mistral と Roumanille との間における orthographe をめぐる論争は、本論の発表にすこし先立って東京で開催された日本フランス語学会 (1961 年 11 月) の席上で可成り詳細に検討したので、本論ではなるべくそれに触れないことにしよう。

1851 年の夏、Aix の大学を終えて故郷 Maillane に戻った Mistral は、その「回想記」に見るように、南仏の人種的意識を昂揚し、南仏語を刷新し、神聖な詩の炎によって南仏語を広く伝播することを決意したのである。

さて、1848 年以降フランス共和国が暗示してきた連邦主義国家建設の希望が、1851 年 12 月、のちの Napoléon 三世による Coup d'Etat のために無残に破壊されてしまうと、共和主義者 Mistral は政治に絶望し、

本格的に *Mirèio* の創作に没頭するようになった。しかし、Mistral 自身云うように *Mirèio* は「横なぶりの風、灼熱する太陽、突風をもたらす北西風 Mistral に吹きさらされるうちに…漸次、芽生えた」ものなのである。

かくて Mistral は翌 1852 年 6 月、Roumanille に宛てた書簡の中で、地主の娘、*Mirèio* と籠造りの若者 *Vincèn* との悲恋の物語 *Mirèio* が「わたしの夢を吸収し、かつ詩神 Muse は *Mirèio* の恋愛物語からいささかも遠去かることをわたしに許さない」と記し、かつ、12 部から成るべき叙事詩 *Mirèio* の第 3 部まで完成したことを指摘している。

1852 年 8 月末、南仏語の刷新と南仏文学の昂揚を目的にした第一回「詩人同志会」*Lou Roumanagi dei noubaire* が Arles で開催された。同年 11 月、Mistral はこの「詩人同志会」で会長をつとめた d'Astros 博士に、「*Mirèio* と題する 12 部から或る詩にひたすら没頭している。いますでにその前半は完了した」旨を伝えている。

翌 1853 年 4 月 Mistral は *Mirèio* の最後の 2 部を残し、10 部まで完成した。ところが、5 月 24 日、Mistral は友人 Anselme Mathieu (1828-95) を連れだつて地中海岸に聳立する古風な roman 様式の教会 Stes-Maries-de-la-Mer へ赴いている。この日こそ、南仏各地に糊口の道を求めて放浪するジプシーたちが、年に一度この寺院を訪れてささやかな幸福を祈るのであるが、Mistral がこの教会を訪れたのは、籠作りの男 *Vincèn* との叶わぬ恋愛の成就を願う娘 *Mirèio* の悲痛な死の顛末を、この寺院の中において展開しようと望んだからであ

る。かくて、Mistral はおよそ、1853年の夏頃には、12部から成る *Mirèio* を一応完了したものとも推定されるが、元来 Mistral 自身、草稿を保存することを極度に嫌ったこともあり、資料不足のために、そのあたりの事状を知る由はない。

とくに、先日の語学会で発表したように当時、orthographe の確立をめぐり、発音表記法を固守する Roumanille と、語源表記法を提唱する Mitsral との間には、はげしい対立があった。しかも、1853年8月 Aix で第2回の「詩人同志会」が開催されその席上で前年以上に活潑な orthographe 論争が展開されることが予想されていた。Roumanille は Mistral を自説に同調させて Avignon 派の意見を統一しようと望んだが功を奏せず、ために、Roumanille は自説を体系づけた orthographe 論 *Dissertation sur l'orthographe* (1853) を刊行した。それにも拘らず Mistral は、みずから Marseille 派や Aix 派の主張する語源表記法を尊重した折衷論をたてて、*Mirèio* を書き改め始めたのである。しかし当時すでに Mistral が *Mirèio* の最後の2部を完了していたかどうか明らかにすることはできない。

それから5ヶ月を経た1854年1月21日、Mistral は Roumanille に宛てた書簡の中で、*Mirèio* の第11部の詩の創作に手をつけたことを伝えている。そこで、1854年の初頭には、Mistral は叙事詩 *Mirèio* を前年夏頃確立した orthographe によって一応全部書き改め、予定の12部までを完成したものと推定されるのである。

以上述べたように、Mistral は *Mirèio* 創作の多忙さと、Roumanille との ortho-

graphe における対立のために、もっぱら Maillane に引籠っていたが1854年の春頃から、次第に Avignon 派の詩人たちとの旧交を懐しみ、彼等に接近する意図を明らかにしはじめた。その理由の一つは、前年 Aix で開催された「詩人同志会」以来、発音表記法と語源表記法との折衷策を標榜する Aix の詩人 Gaut が、南仏文学復興の中心を Aix に設けようと望み、第3回の「詩人同志会」をも前年通り Aix で開催しようと努めていた独占的態度にある種の反感を抱いたとも考えられる。これは Roumanille, Aubanel (1829-85) 等 Avignon 派の詩人たちと共通する意見であり、Mistral を容易に Avignon 派の詩人たちと接近せしめる結果となったのである。

たまたま、同じ1854年5月21日 Avignon 派の詩人 Alphonse Tavan (1833-1905) が入隊することになり、その送別会が Avignon 郊外の Font-Ségugne にある Paul Giéra (1816-61) の邸宅で開かれることが予定され、Mistral は久々に Maillane を発って Font-Ségugne へ赴いた。この日こそ、南仏語 および 南仏文学復興運動 Félibrige 創設の歴史的な日に当るのである。この日に協議されたことは、主として南仏語の刷新のために、Roumanille と Mistral との間における orthographe 論の妥協、調整、統一についてであった。この日以来、Mistral は、新しい Félibrige の orthographe がいままで『「軽蔑されていた言語」 *lengo mespresado* に品位を取戻すに十分である」と確信し「これらの規則が何物であれ、守り通して勝利を収めようと心に誓った」(Aubanel 宛1854年10月18日付書簡) ということである。

そこで、Mistral は必然的にこの新しい orthographe によって、叙事詩 *Mirèio* を三たび改作しなければならなかった。Mistral は同じ 1854 年夏流行したコレラの発生によって、11月にはじめて改作の筆を執ったのであるが、彼の父の失明につづくその死亡、複雑な遺産相続の問題、さらには Félibrige の機関誌 *Armana Prouvençau* (第1輯は 1855 年) の刊行などのために、*Mirèio* 改作の筆は遅々として進まなかった。しかし、Mistral は *Mirèio* を恋人のように終始愛著を以てこれに手を加え、「理想の達成されるまで洗練し、仕上げるのだ」(1855 年 6 月 3 日 M—R) と心に誓って約 3 年間詩作に努めたのである。1857 年から 1 年余りの間は、Mistral は *Mirèio* に最終的な手を加えるかたわら、全篇の詩の仏語訳に当てたのであるが、1858 年 8 月に至り、はじめて *Mirèio* 全篇の詩が Maillane の自宅を訪れた Aubanel, Grivolos, Legré 等の前で朗読された。ここに至って *Mirèio* 出版の期が熟した。Roumanille はそれを Avignon で、Aubanel は Paris で出版することを奨めている。その選択に迷った Mistral はこれに先立つ 1856 年 2 月 *Mirèio* の断章の朗読をきいて深く感動したパリ在住で南仏出身の文学者 Adolphe Dumas に相談すべく、*Mirèio* の原稿を携えてパリへ赴いたのである。かくて 1858 年 8 月 28 日 Mistral は Dumas に伴われて老詩人 Lamartine の許を訪れた。*Mirèio* の高い芸術性に感動した Lamartine は、*Mirèio* 出版の暁には書評を認めたることを約束したのである。

1859 年 2 月 19 日、*Mirèio* は Roumanille の働く Avignon の Seguin 書店から出版された。3 月 16 日 Mistral は Paris へ赴き

同月 20 日に Dumas と共に再度 Lamartine を訪れたのである。Lamartine は、後に彼の「文学講話」*Cours familial de Littérature* に収録される *Mirèio* 讚美の流麗な論文を、Lamartine の自宅のサロンを埋めるパリの上流社会の人びとの前で朗読した。この日以来、一介の南仏方言による若い詩人 Mistral はパリ文壇を風靡し、Charpentier 書店は直ちに *Mirèio* の出版を契約している。

Mirèio を賞讃する論文が各種の新聞・雑誌に掲載され、Mistral はその喜びに異常な興奮を覚え、友人 Legré に宛てて (5 月 15 日) 次のように述べている。「僕は日増しに *Mirèio* の成功に幻惑されている…確かに、*Mirèio* は愛する Provence の地におけるよりは、ここパリにおいて遙かに人気がある。Académicien たちはわたしに深い友情を示している。Alfred de Vigny, Lamartine, Legouvé, Villemain, Ste-Beuve たちが、赤面するほど僕に慇懃な態度を示し、同僚のように話しかける…Villemain は他日次のように云ってくれた『継続するのは、あなたの美しい方言を用いて歌いなさい。フランスは二つの文学を有するほど偉大な国であります』」と。

以上概略みてきたように、Mistral は全篇 12 部から成る牧歌的な叙事詩 *Mirèio* の刊行によって、彼が 1851 年弱冠 21 才のとき、Aix の法科大学で業を終えて帰郷し、「父の家の闕に足をふまえ、はるかに Alpilles の山並みを仰いで心に誓った」目標すなわち、Félibrige の文学復興運動に繋る Provence の人種的感情の昂揚、伝統ある南仏語の刷新、さらには天来の詩の流出と炎とをもって南仏語を伝播するという念願を遺

憾なく実現したのであるが、Félibrige 創設以来 100 年を経過した今日においてさえその高い文学的な価値ゆえに、世の多くの人々によって *Mirèio* が愛読され、研究される理由が存在するのである。

後記一本論発表（1961年11月26日）の直前

すなわち、1961年11月12日、東京教育大学で開催された最終の「日本フランス語学会」において発表した拙論「Félibrige の創設と orthographe の問題」は、「日本フランス語学会」の会誌「フランス語研究」Etude de la Langue Française 第28巻に抄録されている。